

# 配分機関としての中学校

——進路指導の社会学的分析——

教育社会学研究室 志 水 宏 吉

## Junior High School as an Allocating Agency

——A Sociological Analysis of the Career Guidance——

Koukichi SHIMIZU

The aim of this paper is to examine the roles played by the junior high school for the social differentiation of the students. We focus upon the career guidance of junior high schools.

Observing the career guidances of two high schools, two problems would be explored.

- (1) Whether does the career guidance function as the round slice selection or not?
- (2) How is the discretion of the teachers made through the process of the career guidance?

In conclusion, I will point out a paradox that the ideology of teachers as educationalists —We should develop fully the individualities of all students—maintains and reinforces the round slice selection.

### 1. 問題の設定

学校は、社会化の機関であると同時に選抜・配分の機関でもある。学校は生徒たちの間に「社会的分化」<sup>1)</sup> (social differentiation) を惹き起こす。

わが国の教育社会学の分野では、生徒の社会的分化について、これまでもっぱら高等学校に焦点が当てられ研究が進められてきた<sup>2)</sup>。そこで明らかにされているのは以下のようなことである。即ち、各高校がいわゆる学校ランクを軸とした階層構造を構成していること、その高校の階層構造がトラッキングシステム<sup>3)</sup>として作用し生徒たちの進路を限定づけていること、さらに彼らの行動様式・意識等が所属する高校の階層上の地位に対応する形で分化する傾向にあること。

ここで注意しておかねばならないのは、こうした生徒の社会的分化は高校を舞台として生起するわけであるが、高校内の現象を追うだけではその分化の真相を見誤ってしまうおそれがあるという点である。高校でこうした分化が生じるのは、中学校から高校への移行の段階で学業達成をもとにした生徒の選抜が行なわれるからに他ならない。つまり、高校における生徒の進路及び行動様式・

意識等の分化は、彼らの間にある「潜在的分化<sup>4)</sup>が一挙に顕在化したもの」、換言するなら「中学校での選抜の半ば自動的な帰結」と見ることができるのである。してみるならば我々は、次のステップとして中学校における生徒の分化のプロセスに目を向けなければならない。とりわけ、そこにかかわってくる「教師たちの主体的な働きかけ」に注目しなければならない。

そこで本稿では、中学校における生徒たちの潜在的な分化が、各ランク・タイプの高校への彼らの配分という形で増幅される過程に直接的にかかわってくる「中学校の進路指導」に焦点を当てる。設定される問いは以下である。「中学校の進路指導は、いかなる制約条件のもと、いかに生徒たちの社会的分化に主体的に関与しているか。」<sup>5)</sup>

中学校の進路指導は一般に「輪切り指導」<sup>6)</sup> だと言われている。果たして実際に、成績による輪切りはなされているのだろうか。なされているとしたなら、ネガティブな意味合いで語られることの多いその輪切り選抜を成立せしめている条件は一体いかなるものなのか。さらに、そういった体制の維持・強化に教師たちはいかにかかわっているのか。こうした一連の問いに一つの解答を提出するのが本稿の目的となる。

## 2. 先行研究からの示唆

進路指導についての社会学的分析は、シクレルとキツセ<sup>7)</sup>のアメリカのハイスクールにおけるキャリアガイダンスを対象にした研究をその嚆矢とする。従来、生徒たちの学業達成や家庭的背景と彼らの進路との間には統計的に有意な関連のあることが明らかにされていたが、新たに「選抜のプロセス」に着目した彼らは、「学校の指導体制や教師の判断こそが生徒の分化を生み出す契機となること」<sup>8)</sup>を指摘した。具体的に彼らが見出したのは、アメリカのハイスクールは純粋に「競争移動」(contest mobility)の原理が支配する場というわけではなく、教師(カウンセラー)がかなりの「庇護性」(sponsorship)を発揮している場だという事実であった<sup>9)</sup>。つまり高校での選抜は、個々の生徒の能力・成績という要因によって機械的になされるといった類いのものでなくて、彼らの生育歴・性格・風采といった要因をも含めた、それらに対する「教師の複合的な解釈・判断及びそれらに基づく指導」によって成し遂げられるものであるということが指摘されたのである。

もちろん教師の判断・指導の過程が全く無の状態から生徒の分化を導き出すとするのは見当ちがいである。が、それが生徒の「過去」(家庭的背景・学業達成 etc.)と「未来」(進路)とを結びつける媒介項としての役割を果たしているというシクレルらの視点はきわめて当を得ている。本稿でもこうした彼らの視点を踏襲して中学校の進路指導にアプローチすることにする。

さて翻ってわが国では、中学校から高校への移行の問題に関しては、教育機会の階層的格差の実態把握という観点からのいわばハード面に関する実証的研究はいくつかかなされ、貴重な成果を収めてはいる<sup>10)</sup>。しかしながら本稿の焦点であるソフトな部分、即ち中学校の進路指導のプロセスの実態については、残念ながら十分にその説明が進んでいるとは言えない現状にある。そうした中で次に挙げる2つの研究——仙崎<sup>11)</sup>及び山村ら<sup>12)</sup>——が、中学校の進路指導について一定の知見を提出したものと評価できる。

仙崎は中学校における進路指導の流れを追うことを通して、i) 進路指導の主導権は合格予測資料を持つ教師が有し、その指導がかなりの強制力を持つこと、ii) 生徒は主体的進路選択能力に乏しく、強い希望を申し出たとしてもそれには親の意識が強く反映している場合が多いこと、iii) 志望校決定は、「所得・階層」・「学業成績・偏差値・合格可能性」・「高卒後の進路希望・自己決定」の3

つの要因の妥協の産物であること等を明らかにした<sup>13)</sup>。また山村らは、「受験体制」の実態及びそれを支える意識を把握するために、エスノグラフィックな手法を用いて中学校の進路指導にアプローチしている。

そこでは以下のようなことが示されている。i) 教師は親・生徒の志望校が偏差値相応のところであればそれを追認し、不相応のところであれば「高望み」か「低望み」かに応じて「引き下げ」「引き上げ」を積極的に行なう<sup>14)</sup>。ii) 受験体制下の学校では、生活指導・学習指導・進路指導の三者が互いに論拠とし合うことで、相互に依り合いながら遂行される<sup>15)</sup>。iii) わが国における受験体制とそこでの競争は、日本の集団主義的文化によって支えられ、逆にその文化は前者によって維持されるという関係がある<sup>16)</sup>。

前者は志望校決定のプロセスを規定する要因の究明、後者はそうした体制自体を支える意識・規範の探求をそれぞれめざしているという点でフォーカスの置き方に相違はあるものの、我々はこれらの先行研究より現代日本の中学校における進路指導の基本的特質を導出することができるのである。即ち第一に、中学校の進路指導は点数(成績)を中心に据える受験校指導になっていること。第二に、教師らがある成績を有した生徒たちと進路選択肢とのマッチングの過程の主導権を握っているために、教師(より正確に言うなら担任教師)の生徒たちへの働きかけ如何が彼らの分化にクリティカルにかかわってくる。そして第三に、そうした教師の働きかけは、学校が置かれている社会的文脈(制度的な制約・地域の状況 etc.)に直接的な拘束を受けるのみならず、集団的努力主義とでも呼ぶべきわが国の文化的特性に根ざした独特の教育風土の影響を多大に受けていること、以上である。

仙崎及び山村らは、中学校の進路指導について我々の関心に資する数多くの洞察に富んだ観察を残してくれている。しかし惜しむべきは、彼らの観察が未だ記述的な段階にとどまっているということである。彼らはなぜ進路指導が現状のような形態をとっているのかということについて、換言するなら、なぜ教師たちが輪切り選抜体制の維持強化に加担し続けるのかということについては、残念ながら語ってはいない。本稿が最終的に問題にしようとするのはまさにこの点にある。

本稿の仮説は以下の如くである。「厳密な輪切り選抜を維持存続させる上で、教師たちはある一定の積極的な役割を果たしている。」この仮説を検証するために、以下で中学校の進路指導についてのケーススタディーを行なう。

### 3. 事例研究<sup>17)</sup>

ここで設定する問題は次の二点である。

- (a) 中学校における進路指導が、現実に成績による厳密な輪切り指導になっているか否かを吟味する。
- (b) (a)で見るとようなアウトプットを産み出すに至る進路指導の過程を、教師の主体的な働きかけに注目しながら検討し、生徒の進路分化に果たす教師の役割を明らかにする。

まず(a)において生徒の進路選択の構造的特徴を押さえる。具体的に行なうのは、調査対象中学における進路選択にかかわるいくつかの要素の間の統計的関連の吟味である。つづいて(b)では、都市部に位置するある中学校に焦点を絞り、生徒の進路選択に対する教師の個有の役割について、インタビューにより得られた教師の言説及び進路指導にかかわる実際の記録文書をデータとして分析・考察を行なう。

なお対象に選定したのは、「兵庫方式」<sup>18)</sup>と呼ばれる内申書重視の高校入学者選抜方法を採用する兵庫県下に所在する2つの中学校の3年生各1クラス、計2クラスの学級である。

当該地域を対象に選定したのは以下の理由による。本稿の焦点は、進路指導にかかわる教師の主体的営為の解明にあるが、そのためには最も輪切りの的であると考えられる地域（内申書が選抜に絶対的な力をもつ地域）を対象に選ぶのが戦略的に有効である。なぜなら、最も拘束的な条件のもとでこそ、行為者即ち教師の主体的営為の性格が典型的に表出されると期待できるからである。なお、実際に観察を行なった2つの中学校——A中、B中——は、それぞれ都市部・農村部を代表させるという意図で選定した。学校の置かれている社会的文脈の相違によって、指導のあり方がかなりの程度違ったものにな

るだろうことが予想されたからである。

#### (1) 進路選択の構造

まず対象中学校及び対象学級のプロフィールを紹介しておこう。A中は大都市圏近郊の中都市に所在し、同市最古の歴史を持つ下町的な雰囲気漂わせた校風を有する中学校である。一学年9学級を有し、対象となる学級の生徒数は44名（男20、女24）である。担任は新任で当校に着任、以来今年が7年目になる国語担当の男子教員で、3年生の担任は3度目、また本年度は進路指導部長を併任している。一方B中は、県央山間部の旧城下町に位置するこちらも古い歴史を有する中学校である。一学年は4学級、対象学級の生徒数は42名（男21、女21）、担任は転任一年目の音楽担当の男子教員である。教職経験年数は10年、前任校で3年生の担任を3度経験している。

ここで、生徒の進路選択の過程をごく単純に図式的に示しておくことにしよう。図1がそれである。輪切り選抜がなされているかどうかは、生徒の成績と図中Cの「最終志望進路」との対応づけがどの程度画一的になされているかということを見れば判断できる。

ところでA中及びB中における進路選択を検討する際には次の2つの要因に特に留意しておく必要がある。まず第一に、既述のように兵庫県では選抜における内申書のウェイトがきわめて高いということ。そして第二に、両校において公立高校志向が非常に強い（A中で8～9割、B中ではほぼ10割）ということ。これらのことから、両校において成績と最終志望進路との対応がかなり画一的（即ち輪切りの）なものとなることが予想されるのである<sup>19)</sup>。

そこで、それらの実際の対応ぐあいを図化してみたのが表1である。表を一見すれば明らかのように、両校生徒の進路選択は明確に輪切りの様相を呈しているのである。まず都市部のA中においては、進路先のランクは

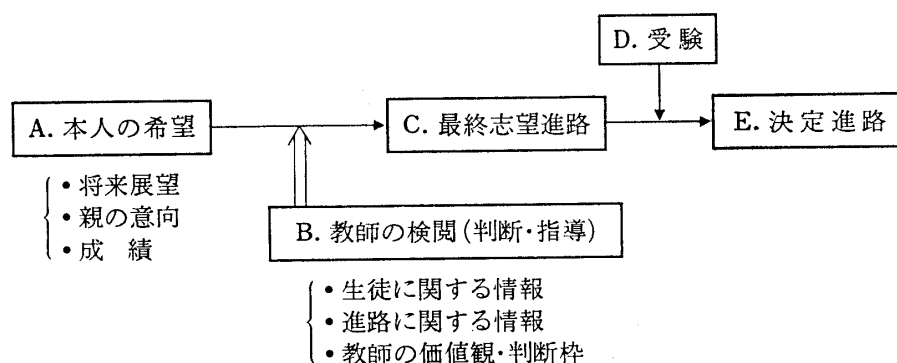


図1 進路選択の過程

表1 成績と最終志望進路(第一志望)との関係

a) A中

○…男子(数字は出席番号)  
□…女子(数字は出席番号)

志望進路 成績 (評定合計)	公立高校 または 有名私学	公立高校 (併願)	一般私学	就職 または 専門学校	計(人)
63以上	⑥ ⑬ ① ③ ⑬ ⑭ ⑮		⑳		8
54~62	⑨ ⑫ ⑬ ⑦ ⑨ ⑫ ⑭ ⑮	②	④		10
45~53		② ⑤ ⑧ ⑪ ⑰ ⑱			6
44以下	⑮	⑫ ⑰ ⑮	① ③ ④ ⑩ ⑰ ⑱ ⑤ ⑧ ⑩ ⑪ ⑲ ⑳ ㉑	⑭ ⑥ ⑬ ㉑	20
計(人)	16	10	14	4	44

(注) 1. 評点は10段階, 最高点は90(10×9)点.  
2. \のはいっている者は「不合格」であった者である.  
(⑥,⑬は, かなりランクの高い私学が第一志望だった)

b) B中

○…男子(数字は出席番号)  
□…女子(数字は出席番号)

志望進路 成績 (評定合計)	X 高 (普通科)	Y 校 (職業科)	私学 または 就職	計(人)
36以上	① ㉑ ⑦			3
33~35	④ ⑤ ⑦ ⑨ ⑥ ⑪ ⑮ ⑰ ㉑			9
30~32	⑧ ⑫ ⑮ ④ ⑤ ⑳	③	⑥	8
27~29	⑳ ① ⑧ ⑭ ⑰	② ⑬ ⑱ ⑨ ⑪ ⑮	③	12
28以下		⑩ ⑪ ⑬ ⑭ ⑱ ② ⑩ ⑪ ⑮	⑬	10
計(人)	23	16	3	42

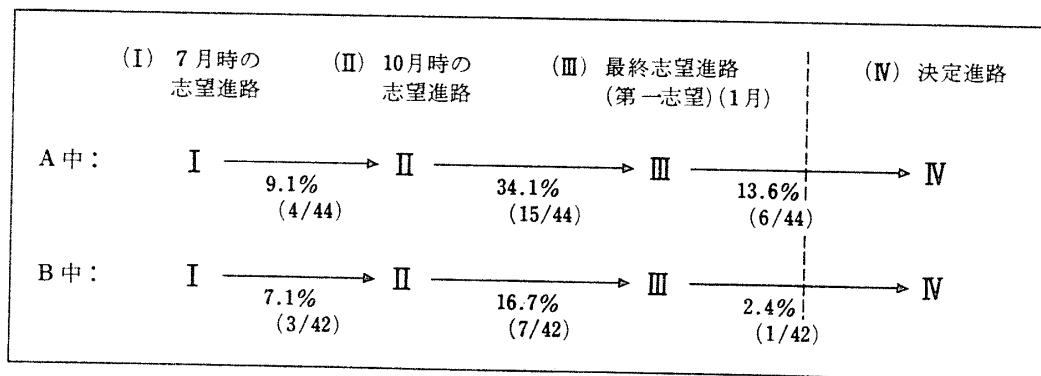
(注) 1. 評定は5段階, 最高点は45(5×9)点.  
2. a), b)とも評定は2学期のものである.

「有名私学」→「公立高校」→「一般私学」→「就職あるいは専門学校」となっており、公立高校への合格が微妙な者(評定が9科目の合計で45~53の者)は「併願」という道を探る。一方山間部のB中においては、実質的な進学先は2つ(普通科X校, 職業科Y校)しかなく、それが評定合計27~29をボーダーとしてはっきりとした序列を形成している。(さらにY校内でも学科によるランク差が存在している。)こうした状況のもとで、いわゆる「高望み」を最後まで押し通した者はB中では皆無、A中で4ケース見られるのみであり、そのうちの3名(⑦, ⑬, ⑮)は教師の予測通り不合格となっている。(合格した一人(⑰)は評定が44で、実力テスト等ではよい成績を収めていた「本番に強い」生徒であった。)ま

た一方、より高いランクの学校へ行ける可能性が強いのにあえてそれを選ばなかった者は、A中で2ケース(⑳, ㉑)B中で1ケース(③)を数えるのみである。(ちなみにその理由の内訳は、「高卒後の就職に有利なように」が2名、「部活動(野球)に力を入れたいから」が1名(A中⑳)となっている。)

このように両校生徒の進路選択は、驚くほどの厳密さをもって結果的に輪切り化されているのである。

ここで一つの疑問が生じる。それは、一体どの時点で彼らの志望進路が成績に対応づけられたものに収斂していったのかという疑問である。それを見るために、いくつかの時点での志望進路の変更の度合及び最終的な進路志望と実際の決定進路との一致の度合を示したのが図2



(注) 1. 数字は、「変更のあった者」ないしは「第一志望の進路に合格しなかった者」の割合.  
カッコ内は実数(該当する人数/クラス全体の人数)  
2. B中の場合は、同一校内での「志望学科変更」も進路変更としてカウントした。

図2 進路志望の変更及び最終志望進路と決定進路との不一致度

表 2 IQ, 出身小学校×成績

a) IQ × 成績

IQ	成績	評定平均 6未満	評定平均 6以上	計(人)
~ 99		↑ ⑫	1 ↓	13
100~109		9	6 ↓	14
110~		4	⑩ ↓	14
計(人)		24	17	41

(注) IQ 値の記録のない者 3名は除外した

b) 出身小学校×成績

出身小学校	成績	評定平均 6未満	評定平均 6以上	計(人)
H小・Y小		↑ ⑮	6 ↓	21
K小		7	⑩ ↓	17
(その他)		(4)	(2)	(6)
計(人)		26	18	44

(注) {H小・Y小…B.C層, 自営業主の多い地区に所在  
K小 ……W.C層の多い地区に所在

である。図 2 より以下のことが読みとれる。まず志望進路の変更は、10月から1月の間に主として行なわれる。これは両校において、志望校決定の最終的な詰めが2学期の期末テスト明けから年を越した一月中旬あたりまでの時期に集中的に行なわれるというタイムスケジュールに符合している。次に両校を比較すると、A中においての方がB中においてより、生徒たちの志望変更の割合が高くなっている。つまりA中の方に、よりダイナミックな進路選択のプロセスが見られるわけである。この原因としては、両校を取り巻く学校環境の違いを挙げることができるだろう。即ち、進路の選択肢が限られているB中に比べて、A中は圧倒的に多数の選択肢を抱えている。(ちなみに、B中の対象学級から進学した学校の総数は5つ(公2, 私3)にすぎないのに、A中でのそれは18(公6, 私12)にもものぼる。)したがってA中生徒の希望及び教師の指導は、それら多数の選択肢の間を揺れ動くことになる<sup>21)</sup>。このように、一般に3年生の後半になって志望進路の変更は多くなされるが、学校を取り巻く環境の違いといった要因により、その変更パターンには中学校により若干の相違が見られるのである。

さて図 2 から読みとれる最後のポイントは、以上のことに関連して、A中では6人の第一志望不合格者を出しているのに対し、B中ではそれがわずか1人とどまっているという点である。これについては、A中では「このクラスは(クラスを)組んだ時から評定の低い子がやけに多くて……」、B中では「こんなにうまく行ったことは滅多にありませんね」という担任のコメントがそれぞれあったことから、当該クラスの生徒たちの学力の偶然的な高低、あるいは入試時の運不運といった要因が関与している可能性が強い。がそれを差し引いても、全校レベルで見るとやはりA中の方がB中より、生徒数の多さ・公立高校をめぐる競争のはげしさといった点で、進路指導に対する「構造的な制約」を多く受けていると見ることができるのである。そして、そのことからA中

では、より複雑かつ精妙な進路指導体制を組織する必要が生じる。次の項ではそれについて検討を加えることにしよう。

なお本題からはそれるが、次の項に移る前にA中生徒の属性<「IQ」, 「出身小学校」>と「成績」との関連について一瞥しておくことにする。(家庭の階層的地位を捉えるために「父親の勤務先」に関する情報を得ることができたが、カテゴリー化が困難なため「出身小学校」をその代替指標とした。)<sup>22)</sup>表 2 がその結果である。サンプル数はいささか少ないが、IQ・出身小学校とも成績と密接な関係を有しており、教育社会学における古典的命題はここで一つの状況証拠を得ることができるのである。

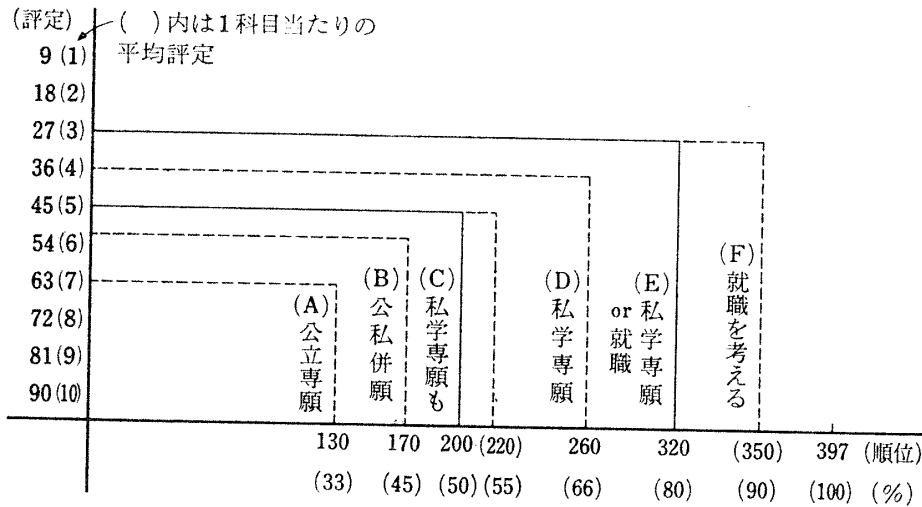
### (2) 進路指導の過程

(1)で見た如く、両中学において生徒の進路選択はきわめて輪切りのなされていた。ここでは、そうしたアウトプットを産み出す進路指導の過程を、特に「教師の判断・指導のあり方」(図 1 の B) に注目して検討を加えることにする。生徒の進路選択にかかわる教師の判断・指導の総体は、独自の判断枠と論理をもって生徒たちの志望を調整するという意味合いが濃いため、「検閲」とでも表現するのがふさわしい。

まず最初に、A中における進路指導の大まかな手順を追ってみたいことにしよう。A中における進路指導の公式的な目標は「中学の3年間を見通して、本人の能力・個性・適性を伸ばして、自らの望む所へ進んで行けるように力をつけてやること」(学年主任)である。そうした理念に基づきA中では、生徒たちの進路意識の啓発のために標準以上の努力が傾けられている。とはいえ、3年次に実際になされるのはやはり他校と同様、成績と進路先との容赦のないマッチングである。

進路についての話が交される三者ないし個人面談は、4・7・9・12月と都合4度持たれる。(その他必要に応じて、随時個人面談あるいは家庭訪問がなされる。)具

図3 進路に関する共通指導（評定・実テ順位をもとにした目安）



体的な進路選択にあたっては、図3のような大まかな基油が学年で設定されており、その大枠に沿った形で指導がなされるのである。次は担任教師のことばである。

「ほとんど全部の子が公立高校普通科という志望を出す、有名私学以外は、そこが大丈夫な時はこちらがエネルギー使って志望変更をさせる必要もないんですけど。ただでも学力の面で達しない時には、これぐらいの子は併願してもいいだろう、あるいはもうちょっと下だったら、併願にしたら不利でアウトになる危険性があるからこれは専願の指導をした方がいいだろうといったふうに、ある程度学年で統一をとりながらやって行くこととなります。」

志望校選定に際しては、評定（通知表に記載される相対評価でなされる成績）のみならず、実力テスト等の結果も加味される<sup>23)</sup>。というのも、私学を受験する際には実際の入学試験で点数を取る力が大きく合否を左右するからである。つまり具体的な志望校の選定は、成績の時期的変化・「評定」と「点数」とのバランス・それらの教科によるバラツキ具合、といった数多くの要素を考慮に入れた「総合的な判断」のもとになされるのである。

志望校決定の最終段階となるのが「進路審議会」である。これは3年の担任・副担任及び学年主任により構成され、400名ほどの生徒の志望校を、合議制で一人ずつこまめに認定してゆく作業を行なう。この作業はまる2日間かかるという。A中では、指導は学年の「共同歩調」を重視して進められる。その意味で、教師の個人色が生徒の進路分化に及ぼす影響は小さいと言えよう。ともあれ生徒たちの進路は、教師たちの集団的な検閲を経て始めて現実的なものになるのである。

このように学校が行なっているのは、学力（成績）と

進路先とのマッチング、それも過不足のないマッチングである。「過」はもちろんのこと、「不足」があってはならない。即ち教師たちは志望校選定に際して、「引き下げ」のみならず「引き上げ」をも行なうのである。この点は重要なので、今少し敷衍してみよう。

教師たちは、生徒の過剰な希望をクーリングアウトするという消極的な立場からだけでなく、その「経営努力」によって毎年ある一定の進路配分のパターンを維持するという積極的な立場から、生徒の進路志望を調整していると考えられる。A中において（そしてB中においても同様に）、見事なまでに生徒の成績と進路先とが一義的に対応しているのは、予め生徒の希望がそうになっていたからと考えるよりも、教師の働きかけによって結果的にそのような対応関係が形づくられたと見る方が合理的であろう。では何故に、そうした働きかけがなされるのか。もちろんそれは、不合格者を極力出さないといった現実的な要請があるからだが、ここではそうしたものの背後にある進路指導の内在的論理とでも呼ぶべきものから導き出される理由を2つ挙げておくことにしよう。

第一は、組織としての中学校が有するインセンティブである。学校はつねに年々卒業してゆく生徒たちのために「よりよい進路」を確保しておく必要がある。そのためには、できのよい子には公立高校へなるだけ行き席を確保しておいてもらわなければならないし<sup>24)</sup>、また長年つきあいのある私学には毎年安定的に生徒を供給する必要がある。そうしたことから、成績上位者より「公立」→「私学」→「就職・専門学校」という進路を割り当ててゆくという戦略が採用されるのである。今一つは上のことと表裏の関係にある。「先のことを考えて、(学力)ぎりぎりの指導はできるだけしない」という担任のことばにうかがわ

れるように、教師たちは成績を生徒の能力の指標として捉え、それをかなりの程度恒常的なものであると仮定した上で、「能力にふさわしい進路先を生徒に勧めるのがのぞましい」というパースペクティブを有しているように見受けられる。筆者の印象では、教師たちは、〈能力→成績→学校ランク〉の対応関係を、おそらくは現実以上に静的で安定的なものと考えているようであった。

つまるところ教師たちは、静的な〈能力→成績→学校ランク〉の対応図式に基づき、例年の進路実績に照らし合わせながら、ある学力と希望とを有した生徒たちを進路先に割り当ててゆく。もちろんその指導にのらない生徒もいる。そうした生徒は、極端な表現をすれば教師の役割遂行を妨げる「攪乱要素」とみなされる。次のことばは、対象学級の担任教師に、進路指導部長という立場からの「学年全体に対する評価」について尋ねた時のものである。

「例年よりは少しよかったという判断をしていいんじゃないか。(公立にたくさん合格したから? あるいはどこへも行けない子が少なかったから?) まあそういうこともありますね。(中略) 例えば、こちらの指導にのらないで、落ちるとわかっている所を受けさせざるを得なかった数とか、そういうことも去年より少なかったんではと思いますね。ある程度こちらが読んだ通りの動きをしてくれて、それに近い結果が出たと思っています。」

ある時期をなると教師たちは、進路配分についてのシミュレーションを行なう。つまり、誰がどこへ行けば学年全体の進路配分が最適なものになるかということ、机上で検討するのである。そしてそれ以降は、その検討の結果で上がった青写真にしたがって生徒を動かしてゆくことが彼らの目標になる。要するに進路指導に携わる教師たちにとって、生徒が自分たちの意図通りに動い

てくれることが第一義的に重要なことになるのである。

### (3) 具体的指導の類型

最後に、進路指導のより具体的なあり方を見るために、個々のケースに対する教師の個別的な指導に目を向けてみることにしよう。次ページ表3は、対象学級の男子のプロフィールをまとめてみたものである。(女子については紙幅の関係で割愛する。) 指導はもちろん対象となる生徒に応じて文字通りケースバイケースであろうが、生徒及び進路先は教師たちの頭の中で必ずある分類基準に即して典型的に捉えられていると考えられるため、生徒に対する進路指導もまた典型的に把握することが可能である<sup>25)</sup>。ここでは表3より、生徒の類型に基づく具体的指導の類型の抽出を試みた。それが図4である。

図中のたて軸は、設定及び実テの点数等で測られる「学力」の高さを、横軸は「生徒の生活ぶり」についての教師の主観的評価の高低をそれぞれ示している。この横軸については注釈が必要であろう。具体的な指導は、たて軸で示された学力に応じて一義的になされるというわけでは決してない。その指導に大きなバリエーションを与えるのが、生徒の生活ぶりに関する教師の評価なのである。山村らが指摘したように、進路指導は生活指導と不可分な関係にあり、両者はそれぞれを互いの論拠としながら受験を控えた校内の秩序維持あるいは生徒のモラルの高揚といった目標に向かって相補的に奉仕し合う。それ故生徒の生活ぶりについての教師の評価が、彼に対する進路指導を組み立ててゆく上での重要なファクターとなるのである。

さて、図中横軸の〈positive⇌negative〉な評価は、本稿に関連のある限りでは具体的には以下のような二分法によって、教師により表明されていた。即ち、

- ・努力する(まじめ) ⇌ 努力しない(流される)

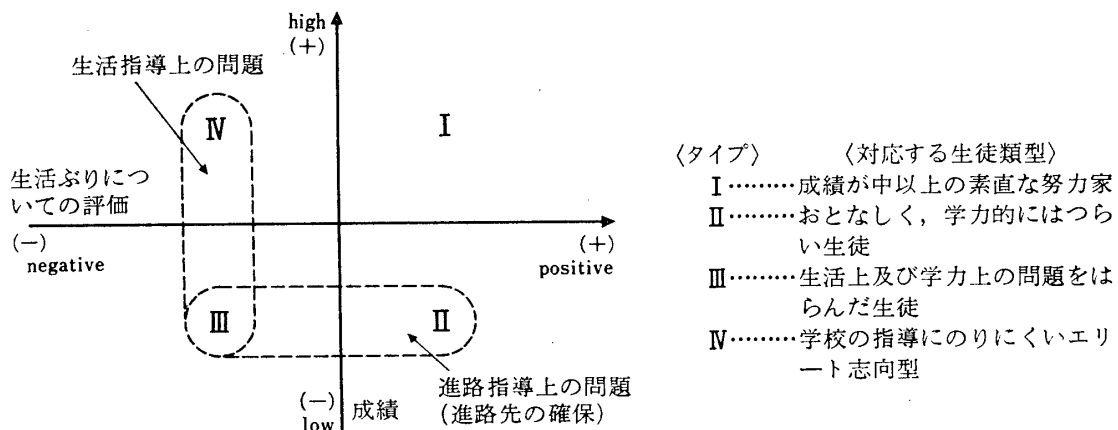


図4 具体的指導の類型

表3 男子の

番号	氏名	A 属 性			B 教 師 の 評 価	
		父親勤務先	出身 小学校	I Q	能力	性 格 及 び 進 路
1	K. A.	A設備工業	H	115	B	自分からものごとに立ち向かう傾向が弱い。本人の希望に合った所が見つければいいが。
2	K. O.	B 実業(株)	K	102	B	まじめだが学習面での伸びが見えない。家庭のことなど考えて公立高校へ行ってほしい。
3	T. O.	C水道商会	H	97	B	好人物でクラスをリードできる子。学習面では多少しんどく、私学にとどまるんでは。
4	H. O.	D化学工業	市 外	—	B	去年までひどい登校拒否、私学普通科でなんとかやってゆけるんでは。
5	A. K.	日本通運	Y	102	B	努力家でまじめな、明るい子。最終的には公立へ行けるだろうし、行ってほしい。
6	Y. K.	E 発 動 機	K	123	A	かなり成績がよいが、利己的ではない。有名私学より公立でのびのびやった方がよいのでは。
7	T. K.	(母) 県立保養所	校区外	104	C	母子家庭でおとなしい。生活面ではきちんとできない所あり、普通科以外になるだろう。
8	H. K.	フジタ工業	K	115	B	生活面で落ちつきがもう一つ。本人も親も公立志向が強く、なんとか受かるだろう。
9	S. T.	F 電 業 社	Y	97	A	着実にまじめに努力するタイプ、家庭の状況から公立に行かせたい。実力は十分ある。
10	A. N.	G 工 務 店	Y	95	C	父母特に母に反発強い。勉強面でも意欲足りず。野球を続けられる学校に進むだろう。
11	M. N.	H (株)	K	102	B	生活面でルーズな所あり、もともとまじめだが、希望通り公立に進むだろう。
12	Y. N.	I 興 業(株)	H	115	B	スポーツマンでさっぱりした人柄。着実な目標を持てる子。公立に行くだろう。
13	S. N.	キリンビール	K	113	A	思いやりがあり、当番活動等まじめにやる、公立に行くだろう。
14	S. H.	J 会 館 (パチンコ店)	市 外	80	C	家が転居をくり返し、学力面でもついて行けない、就職を考えるしかない。
15	K. H.	K 工業所 (自 営)	K	104	C	努力をしない、わがままな所あり。本人、親は公立工業を希望だが、私学に行くのでは。
16	M. M.	三ツ星ベルト	Y	119	A	まじめで、あとで人の尻ぬぐいをするタイプ。有名私学をねらっていたが、公立になるのでは。
17	H. M.	L 生 保 相 互 会 社	H	117	B	やや男の子らしくない性格、おとなしい。公立が向いているが、がんばり次第。
18	T. Y.	(療 養 中)	H	90	C	勉強はあまりできない。私学もひょっとすると無理。専門学校か。
19	M. Y.	M 精 機	H	88	C	おとなしい。努力するわりには伸びない。なんとか私学にはいれる所をさがしてあげたい。
20	K. T.	—	校区外	—	—	—

\* 能力 {A……「勉強ができる」。B……「ふつう」。C……「勉強があまり得意でない」}



## プロフィール

C 成 績				D 進 路 志 望				決定進路	備 考
2学期評定		10/11月実テ順位		第1回 (7月)	第2回 (10月)	最終志望(1月)			
9教科	5教科	5教科	3教科			第一志望	第二志望		
36	22	262/199	316/293	未定	公・普	○ 私立H高	/	私立H校	
47	25	185/218	218/227	公・普	→	× →	○ 私立S高	私立S高	
39	21	322/313	316/320	公・普	→	○ 私立K高	/	私立K高	
18	8	—	—	私立	→ (普)	○ → (G商)	× 私立D高	私立G高	3年次もしばしば 学校を休む。G高 は東京に所在。
50	27	200/188	275/271	公・普	→	○ →	○ 私立O高	公立工高	
71	45	5/6	1/2	公・普	私・普	× → (A高)	○ 公・普	公立T高	
36	16	353/346	362/359	公・工	→	× 私立N工	× 公・工	公立A高 (他県)	家庭の事情もあり、 二次募集でA高に
48	29	150/202	195/210	公立	→ (普)	○ →	○ 私立J高	公立工高	
56	33	68/92	73/91	公・普	→	○ 公・商	/	公立N高 商業科	
39	19	308/346	312/346	私立	→ (普)	○ → (Y高)	/	私立Y高	スポーツ推せんで 合格
52	30	137/185	139/213	公・普	→	○ →	○ 私立I高	公立K高	
55	33	85/90	79/100	公・普	→	○ →	/	公立I高	
61	34	56/51	95/48	公立	→ (普)	○ 私立N高	公・普	私立N高	
15	8	377/371	384/380	就職	→	○ →	/	就 職	就職先は実家近く のN工業(株)
40	20	239/291	229/307	公・普	→	○ 公・工	/	公立A高 工業科	
65	42	15/14	11/12	公・普	→	× 私立R高	○ 公・普	私立M高	M高の2次募集に 合格、公立高校は 入学辞退
44	26	82/142	197/149	公・普	→	○ →	○ 私立J高	公立I高	
23	11	367/381	373/379	進学	私・普	○ 私立E高	/	就職+定 時制	E校に合格したが 入学を辞退した
31	17	343/352	330/348	公・普	私・普	○ 私立Y高	/	私立Y高	
65	33	60/120	117/167	—	公・普	○ 私立J高	/	私立J高	2学期に転入、野 球に力を注ぎたい ためJ高に

※ 進路志望 {→…変更がなかったことを示す。/…専願のため、第2志望の高校を作らなかったことを示す。}  
○…合格。×…不合格。

- ・きちんとしている⇔だらしない(ルーズ)
- ・クラスのためになる(信頼があつい)⇔利己的, など。

そしてそれぞれの対立項の前者は「指導にのる」, 後者は「指導にのらない」という進路指導の基本にかかわる二分法と結びつけられて, 教師によって表明される傾向があったのである。即ち, 生徒が(進路)指導にのらないということは教師にとって大きな問題であるが, そうした「のらない」生徒は, 往々にして教師の中では「生活上においても問題性を有している生徒」として把握されることが多かったのである。

ここで, 2つの軸を交差させて得られる理念型的な4タイプに属すると考えられる事例を1ケースずつ取り上げ, 担任の所見を手がかりに指導の実際を追ってみることにしよう。(各事例の□の中は, すべて担任の所見からの引用である。)

#### タイプI (5番, A.K.)

努力家でまじめ, 明るい。楽々と公立をパスする力はないが, 最終的には行けると思うし, 行かしてやりたい。そこで十分にやっけてゆける子である。ただし, 私学を併願することになっている。

2学期の評定が50とクラスの中位に位置する彼に対して, 担任は公立高校で「十分にやっけてゆける」と積極的な評価をなしている。生徒の努力する姿勢を高く買っている例である。彼に対してなされた実際的な指導は, 保険的な意味で受験した併願校の選定に際してアドバイスを与えることぐらいのものである。

#### タイプII (19番, M.Y.)

まじめなタイプの生徒だが, 能力的に恵まれないためか学力の伸びがかんばしくない。あれこれと学校を希望できない状態なので(校風が)おとなしいとされる(私立)Y学院高で勝負するよう薦めてその気になっている。

性格的におとなしく, 努力をしても成績が伸びない彼に対して, 担任はきわめて同情的であり, 「なんとか私学で入れる所をさがしてあげたいなあ」と語る。こういうタイプの生徒は各クラスに数名ずつ存在し, 彼らの落ちつき先を見つけ出すのが担任及び進路指導担当者の腕の見せどころとなる。

#### タイプIII (15番, K. H.)

あまり努力をしない。わがままな所あり。指導にはその場限りで終わる。2学期半ば隣の中学と集

団で乱闘事件を起こし, その前後から学習面での集中を欠き, 成績も下降の一途, 生活態度を改めてがんばろうという気力を見せない。学年全体の意向として私立工業科の方が安全と判断し薦めたが, 本人の希望を受け入れて公立工業科を受験する。ダメだった時は父親のつとめる鉄工所に見習いとして行くことになっている。

担任は彼をやや持て余しきみである。生活面においても, 進路面においても, 担任の指導努力はカラ振りに終わっている感がある。こうした生徒は「学級内で最も問題性をはらんだ生徒」と認知され, 彼を手なづけることがクラス経営を成功させるための鍵となるため, それに向けてかなりのエネルギーが割かれることになる。

#### タイプIV (6番, Y.K.)

「いい学校に行きたい」という希望を母子ともにもち, 有名私学のA学院を受験しようとしている。総合選抜地域であるので校区のI校(公立)を不合格時に受けるよう薦めているが, 母子そろって校区外のN校(同じく公立)を優秀な生徒が多いという理由で希望している。3学期より授業中のわざとらしいいねむりなどが目立ち, 係の集会に無断で欠席したりしている。

彼もまた, 教師にとっては問題性をはらんだ生徒である。塾に週5日通う彼の行動は, 塾を準拠としてなされており, 学校教師の指導は耳にはいらない感がある。学校の規範を無視しマイペースを守る彼を担任は「本末転倒も甚しい」と非難する。A中にはこうしたタイプの生徒はさほど多くないが, 彼らの行動様式は学校の進路指導の存立基盤そのものを脅かす恐れがあるため, 彼らの存在は教師たちにとって頭痛のタネとなっている。

以上類型を設定し男子の事例をいくつか追ってみた。<sup>26)</sup> しばしば輪切りだとして断罪されることはあるが, 教師たちのなす指導は決して紋切り型の通り一遍のものではない。生徒のタイプに応じ, さらには家庭の状況や将来の展望といった各生徒に個有な事情に応じ, 進路指導はきわめて多彩に組み立てられるのである。ちなみに, どうしてこれほどばく大なエネルギーを進路指導に費やすのかという筆者の質問に, 担任教師はこう答えている。「こんなふうにしつこい指導をしているのは, わが校だとかC中(隣接する中学)だとか学力的にしんどい所でしょうね。ある程度手立てをしないと生徒の進路先が絶たれる場合がたくさん出てくる可能性があるんで

ね<sup>27)</sup>。(中略) それに、下町風の人情味のある、といった伝統もあるんでしょね。何でもかんでも理屈にとどまらないで、心情的な部分にまで立ち入った指導になりますね。』<sup>28)</sup>

#### 4. まとめと今後の課題

まず前節での分析の結果を要約しておこう。

- ①調査対象校における生徒の進路選択は、厳密に輪切りのなものになっている。輪切りの内実は中学校を取り巻く学校環境の影響を強く受けるが、一般に都市部の方が農村部においてより、輪切りは精密なものになると予想できる。
- ②生徒の受験先、進路に関する共通の了解事項を有した教師集団の検閲を経て決定される。ここで重要なのは、生徒たちの志望が教師によって過不足なく調整されてゆくという点である。こうした調整がなされる理由は次の二点に求められる。ひとつは、後輩たちのためにつねによりよい進路を確保しておく必要があると教師が考えているためであり、今ひとつは、彼らが生徒の成績を彼の能力を表示するものと仮定した上で、「能力にふさわしい進路先を」というパースペクティブを有しているためである。このような論理にしたがって生徒の志望が調整される結果、厳密な輪切りが現象することになる。
- ③具体的な進路指導の成績に基づいて一元的になされるというわけではなく、個々の生徒に対して具体的な指導なり助言なりが与えられる際には、彼らの生活ぶりという要因が重要な意味を帯びてくる。このことは、生徒に対する進路指導は彼に対する担任教師のある意味で全人的な判断を基盤にしている、ということを含意している。さらにこのことは、担任教師がクラスを運営してゆく上で進路指導という仕事は、生活指導や学習指導といったものと不可分からまわりあいながら遂行されているということをも示している。

客観的には生徒の成績と用意されている進路先とのマッチングのプロセスである中学校の進路指導は、教師の主観の中では依然教育的な意図を濃厚にはらんで思念されており、そうしたパースペクティブから具体的な指導が組織されている。そこに教師の教育者としてのイデオロギーが、今日の輪切り選抜を維持・強化させているというパラドクスを見ることができるのである。つまり、生徒たちの「個性」を最大限に生かすという教育者としての教師がもつ理念的な目標は、現実には成績と進路先

とのマッチングを最適化することによって達成される。というのも進路指導の文脈においては、生徒の「個性」は通常「能力」ということばに置き換えられ、さらにその「能力」は「成績」によって代表されるのがもっぱらだから。そうして生徒たちの個性即ち能力を最大限に生かそうという教師たちの努力が展開される結果、厳密な輪切りが現象することになる。したがって、進路指導に携わる教師にとって輪切りは必ずしも必要悪ではないのである。現実の種々の制約条件が本来の進路指導の実現を妨げており、中学校教師たちは輪切りに心ならずも加担している、といった常識的イメージは今や捨て去られなければならない。教師たちは、より積極的に輪切り選抜に関与しているのである。

とはいえ、教師の生徒に対する〈能力⇔成績⇔進路〉の対応関係の固定的把握及びそれに基づいた進路の最適配分への努力こそが、輪切り体制存続の元凶であるとする結論は正しくないだろう。教師に輪切り選抜を現実的に強いているのは、まずもって序列化した高校群、あるいは父母生徒の高い学歴要求といった組織外的な諸要因からの要請なのだから。ただそうした制約条件のもとで、教師の理念ないし判断枠が先に述べたような筋道で輪切り体制の維持・強化に独自に貢献している、という側面が現実存在していることを否定することもやはりできないのである。

シクレルがアメリカで観察した如く、わが国でも学校の指導体制や教師の判断が生徒の分化を生み出す契機となることが本稿の分析により明らかになった。本稿で取り上げた事例はいくつかの点で特殊であろうが、ここで検討を加えた進路指導の手続き及びその背後にある指導の論理は、かなりの程度わが国の公立中学校に普遍的に観察しうるだろうと推測できる。

ここでシクレルらの知見との対比で注目しておきたいのは、アメリカでは教師たちが「競争移動」の原理の貫徹を妨げるような働きをなしている（「庇護性の発揮」）ということが指摘されているのに対し、対照的にわが国では、教師の働きは「競争移動」の原理を強化する方向に生徒たちに働きかけること（「成績を軸にした志望進路の調整」）にあると言えなくもないことである。これはわが国の学校文化の特性の問題につながってゆく重要な論点であるが、ここでは深入りする余裕がもはやないので論点を指摘するだけにとどめておく。

最後に残された課題について。本稿の関心は、生徒たちの社会的分化にかかわる中学校の進路指導の役割を究明することにあつた。今後さらに展開しなければならないと筆者が考えるのは、分化・選抜の圧力にさらされる

生徒たちの側での過程を探究することである。なぜなら、教育現象の社会的解明を旨とする教育社会学は、「教育過程の教育を受ける側へのインパクト」こそをその中心的テーマと設定すべきだと筆者は考えるからである。この点に関しては、近年欧米とりわけイギリスにおいて研究の蓄積が見られるが、わが国においては未だ「教育という営為を成り立たせている2人の主人公のうちの片方=生徒」については、ブラックボックス視されているか、あるいは憶測をもって語られるかのどちらかにとどまっている。進路指導の役割を適切に評価するためには、それに対応する生徒の側での過程を究明することが不可欠であろう。本稿ではそこまで肉薄することができなかった。後日を期したい。

(指導教官 天野郁夫教授)

### 注

- 1) ここでは「社会的分化」ということばを「生徒たちへの教育的及び社会的地位の配分とそれに付随する彼らの意識・行動様式の分化」という意味で用いる。
- 2) このテーマに関する成果は、次の文献に手際よくまとめられている。岩木秀夫, 耳塚寛明編「高校生——学校格差の中で」(現代のエスプリ, 195号), 至文堂, 1983年。
- 3) トラッキングとは「たとえば複線型学校システムのように法制的に生徒の進路を限定するというに法制的には生徒の進路を限定するというのではないにしても, 実質的にはどのコース(学校)に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定されること」を意味する。藤田英典「進路選択のメカニズム」, 山村健, 天野郁夫編「青年期の進路選択」, 有斐閣, 1980年, 118頁。
- 4) もちろんこの潜在的な分化はその源を, 小学校段階さらにより逆のぼって家庭的背景に求めることができるのは言うまでもない。
- 5) 同様の関心は次の論文においても語られている。川嶋津津夫, 藤田英典『『学校の社会的機能』研究に関する一考察』名古屋大学教育学部紀要第28巻, 1981年, 130頁。
- 6) 輪切り指導の実態については以下の文献を参照。毎日新聞社編「内申書・偏差値の秘密」, 1981年, 佐藤章「ルポ-内申書」未来社, 1985年。
- 7) シクレル, A.V. とキッセ, J.I. 「選抜機関としての学校」カラベル, J. 他編, 潮木守一他訳「教育と社会変動 上巻」東京大学出版会, 1980年, 所収。
- 8) 上掲論文, 187頁。
- 9) ここで用いられている「競争」, 「庇護」という用語は, 社会移動のパターンの類型を提出したターナーの説を下敷きにしたものである。Turner, R. "Sponsored and Contest Mobility and the School System," American Sociological Review, Vol. 25, 1960.
- 10) 代表的な文献として次のものを挙げておこう。秦政春「教育機会の格差—高校への教育機会を中心に」, 麻生誠編「学校ざらい勉強ざらい」福村出版, 1983年, 所収。
- 11) 仙崎武「進路指導の実態と課題」『教育社会学研究』第32巻, 東洋館出版社, 1977年, 31-51頁。
- 12) 山村賢明他「受験体制をめぐる意識と行動—現代の学校文化に関する実証的研究」伊藤忠記念財団, 1983年。
- 13) 仙崎, 前掲論文, 38-39頁。
- 14) 山村他, 前掲報告書, 144頁。
- 15) 同上書, 257-260頁。
- 16) 同上書, 278-280頁。
- 17) 具体的に実施したのは, 教師に対する3時点(7, 10, 3月)における聴き取り, 教師及び生徒に対する質問紙調査, 生徒に対するインタビュー, そして進路指導に関する各種記録文書の収集である。
- 18) 昭和43年度より導入された選抜方式であり, 中3時の10段階評定の合計で合格優先順位が決められる。教科別の入学試験を課さない等きわめてユニークな選抜方式であるが, i) 中学校において恒常的な競争と点数を助長する, ii) 基礎学力の充実に不十分な面があるという反省から, 61年度より他県なみの入学試験を重視する方式に改善しようとする方針が, 先ほど県教委から出された。兵庫県教育委員会「兵庫県公立高等学校入学者選抜制度。方法の改善について」1984年8月。
- 19) つまり, 公立(普通科)高校をめぐる内申書の点数に基づく競争の結果として「輪切り」がもたらされるのである。
- 20) B中では「10段階評定」での成績評価を入手できなかったもので, 通知表に記載される「5段階」(サブカテゴリーがあるので実際は7段階である)のそれで代用した。
- 21) なお, 明確に「成績が足りないから」という理由で志願変更をした者は, A中で9名, B中で10名と, 両校において全体の4分の1程度の数となっている。
- 22) 出身小学校を代替指標としうるのは, A中の校区がホワイトカラー層を主たる住民とする地区と, ブルーカラー・自営業主層を主たる住民とする地区とに小学校区を単位として区画しうるからである。
- 23) A中では, 業者テストの偏差値は利用されていない。ただし, 指導の重要な資料となる数度にわたる実力テスト(A中向け)の作成・採点は業者に委託されている。
- 24) 教師が生徒を公立高校へ積極的に送ろうとするのは, 「高校増設と逆の動きを作らない」あるいは「総合選抜を廃する動きを作らない」という, 教師のイデオロギー的立場からの要請があるためでもある。
- 25) シュッツ, A., 森川眞規雄, 浜日出夫訳「現象学的社会学」紀伊国屋書店, 1980年, 85-92頁。
- 26) 以下は, 本文でふれた4人の男子生徒の最終志望決定後の「決意表明」からの抜萃である。  
(5番, A.K.) 「ぼくは, (私立)O校と(公立)I校を受験しようとしています。O校を受験しようと思ったのはぼくは三科目がわるいので五科目のところがいいと先生に言われたので自分もそのほうがいいと思ってそうしました。(中略)でも, この希望はかなうかどうかというせとぎわですが希望がかなったら一生懸命勉強して, とまかく授業についていけるようがんばりたい。」  
(19番, M.Y.) 「ぼくが, 希望としている高校は(私立)Y学院高等学校の普通科です。なぜこれを受ける理由は別れないし, あとこの学校しかなかったのです。(中略)もしもすべったら, 専門学校をえらぶしかありません。だから, Y学院めざしてがんばって, 合格するようにしっかり勉強します。」  
(15番, K.H.) 「自分は, 県立A高校をじゅけんします。(中略)自分にとっては, この機械科の学校がぴったり, あっている感じがします。(中略)自分には, この学校は, 難しいということでそうとうな努力が必要と思う。この学校が, もしおちれば, ていじせいにいき, はたらきながらがんばろうと思う。」  
(6番, Y.K.) 「ぼくは, この二月十五日に, (私立)A学院高校に挑戦します。(中略)自分がこの学校を選んだ理由は, 大学進学率が非常に高いことと, 生徒の自主性に

任せて学校生活ができるという、2つの特色があったからです。(中略) そして、もし合格したら今以上にがんばって勉強して、高校生活を、有意義にすごしていきたいと思えます。』

- 27) 中学校教師たちにとって、生徒を何らかの進路につかせることは、教師の義務だと捉えられている。次のことは学年主任のものである。「(中3は)義務教育を終える年だか

ら、中学浪人という形で送り出すわけには行かん。必ずどっかに行ったということが必要やね。』

- 28) この担任は一年間で、家庭訪問を正規のものを除いてのべ100回程度行なったと述べている。

- 29) ・ Woods, P. (ed.), Pupil Strategies, (Croom Helm, 1980)

・ Willis, P., Learning to Labour, (Gower, 1977)